ソリマーノの段（二）
――『解放されたエルサレム』第九歌の続きと第十歌前半の訳――

Solimano narrato nei canti 8,9,10 della *Gerusalemme liberata* (2)

水　野　留　規
MIZUNO, Ruki

Riprendo la traduzione del Canto 9 da là dove ho lasciato la volta scorsa; abbiamo visto l'arrivo dell'esercito di Solimano in prossimità della città di Gerusalemme, ed ora scendono dalla città in campo anche le truppe del re Aladino guidate da Clorinda ed Argante. Il Canto 9 è occupato principalmente dalle scene di battaglia, in cui anche le forze infernali e celesti intervengono. La descrizione delle stragi è minuziosa e raccapricciante, benché nello stesso tempo ci sia spesso qualche elemento patetico. Le prime ottave del Canto 10 descrive la fuga di Solimano verso l'esercito di Egitto ma il mago Ismeno lo induce a dirigersi a Gerusalmme.

第九歌訳（〔　〕は筆者による補足説明、原文は伊語韻文、原作は一五八一年初刊、全二十歌）(一)

〔二十五〕スルタン〔ソリマーノ〕(二)が兜に戴いているのは、巨大で、不気味な龍の像。体を伸ばし、頭をくねらせ、後足で立ち、翼を広げ、二股に分かれた尾を丸く曲げている。三つの舌を震わせ、青黒い泡を吐き、しゅーという音が聞こえてくるようだ。戦いが激しさを増すにつれ、龍も躍動して燃え上がり、煙と炎とを口から噴出する。

〔二十六〕邪悪なスルタンは龍が発する炎によって赤く染まり、その容貌はキリスト教軍兵士達の眼に恐るべき敵として映る。かれらの動揺たるや、闇の中で無数の稲光に照らされた荒海を見て、船乗りたちが慄く様にも似る(三)。或る者は足を震わせて逃げ、或る者は大胆にも剣に手をかける。混戦の様相を呈する戦場に闇がゆっくりと忍びより、危険は包み隠されることによってさらに増大する。

〔二十七〕もっとも大胆な者たちの中から、テヴェレ川の岸辺で生を受けたラティンが進み出た。この男は苦労と齢を重ねてきたものの、まだ体力も気力も衰えていなかった。ほとんど同じ年頃の五人の息子達は、まだ発育途上にある身体とあどけない顔にはそぐわない重い武具を付けて、かれが戦に向かうときには、戦地がどこであろうとも、かれにいつも付き従った。

〔二十八〕そして父親の感化を受けて、敵を血祭りにするべく剣と闘志に磨きをかけていた。そんな子供たちに向かってラティンは言う、「逃げる兵士達に襲いかかるあの悪党を討ちに行こう。奴はわれらの仲間を斬り、血まみれにしているが、おまえたちはいつものように自信をもって立ち向かうのだ。奴が掲げる武勲は、、おお息子たちよ、危険を克服して勝ち得たものにあらず、偽りの武勲なのだから。」

〔二十九〕ラティンの態度は、雌獅子が自らの子供たちに対してとる態度のようだった。たてがみがまだ生えず、鋭い爪や残虐な歯がそろう年齢に達していない子供たちを、雌獅子は狩りに連れて行き、危険に晒そうとする。そして自分たちの棲みかである森を荒らし、怖気づいた獣たちを追い払う狩人を襲うよう、自ら範を示して子供たちに教え込む。

〔三十〕恐れ知らずの五人は、勇ましい父親の後ろを進み、ソリマーノに近づくと、その周りを取り囲む。同時に、意を一つにして、あたかも一人が成す業のように、かれらは六本の長い槍を突きたてる。だが、もっとも年長の息子は槍を捨てて、剣を手にすると、無謀にもソリマーノに斬りかかり、その馬を鋭い剣で刺して倒そうとするが、試みは失敗に終わる。

〔三十一〕嵐に曝された岩礁が荒波に打たれても海に呑みこまれることなく、怒り狂う天から降り注がれる強烈な雷電や風や大波に耐え忍ぶように、凶暴なるスルタンは――自らに剣や槍が向けられても動じることなく――恐ろしい顔をもたげ、己の馬を傷つけた者に対しては、その頭を両目と両頬の真ん中で真っ二つに割る。

〔三十二〕崩れ落ちる兄にアラマンテが憐れみの手を差し伸べ、体を支えようとする。何と虚しく、愚かな憐れみの情であろうか（！）、弟はそのために、自らの破滅を兄の死に添える羽目となる。異教徒の男はアラマンテの腕に剣を振り落とし、兄を支えようとした弟を、兄に続いて斬りつける。両者は共に倒れ、血が混じった最後の息を吐いて、重なり合って絶命する。

〔三十三〕次にソリマーノはサビーノの槍――この少年は離れたところから槍を突き出した――を破壊すると、馬に乗ったままサビーノを襲い、斬り、少年が体を震わせつつ倒れると、その体を踏みつける。少年の魂が苦しみぬいた挙句に外へ出て、青春の幸せで愉快な日々の暮らしを満たしていた甘い息吹と悲しい離別を遂げた。

〔三十四〕生き残ったのはピーコとラウレンテ。父親にとっては価値のある、一度きりの分娩によって生まれた双子は、余りにも似ていたために、微笑ましい取り違えの種にしばしばなったものだった。しかし、自然がかれらの間に区別をつけなったのに対し、かれらに敵意を抱く錯乱の男は、二人に対していまや異なった化粧を施そうとする。かくも残酷な分け隔てがあるだろうか、一人は頭部を胴体から切り離され、もう一人は胸を抉られた。

〔三十五〕もはや父親ではなくなったラティン（嗚呼、残酷な運命は

一瞬にして多くの息子達をかれから奪い去った）は、五人の死を前にしていまや自らの死を、そして自らの家系が途絶えることを悟る。悲惨な境遇に置かれたこの老人が、なお生き伸びて戦おうとするほど強靭で、不屈の精神をどうして保持することができたのか、私には分からない。おそらくかれは殺された息子達の姿や顔を見なかったのであり、

〔三十六〕かれに同情した闇も残酷な情景をかれの視界から幾分隠したのであろう。だが、自らの死を伴わない勝利は、ラティンにとって何の価値もなかった。かれはソリマーノを傷つけようとする一方で、自らが傷ついても構わないと思うようになった。かれがより望んでいたのは、仇打ちを果たすことだったのか、それとも自らが死ぬことだったのか、はっきりと判明しないのだ。

〔三十七〕ともあれ、ラティンはおのれの敵に向かって叫ぶ、「では俺の腕はかくも弱く、かくも見下されているのか、どんなに挑発しても、俺に対する憎しみをおまえに植え付けることができないほどに？」こう言うと黙り、命をも奪うほど苛烈な一撃を浴びせる。剣は鎧と鎖帷子を貫き通して、脇腹に当たってそこを傷つけ、傷口からは熱い血がほとばしり出る。

〔三十八〕このように叫び、斬りかかったラティンに対して、残忍な野人は刃を突き立てて、怒りをたぎらせて応戦した。ラティンの鎧を切り裂き――その前には硬い皮紐が七重に巻かれた楯を破壊し――剣を内臓に刺し込んだ。哀れなラティンは息も絶え絶えとなり、口からは血が吐き出され、それと交互して傷口からも血が溢れ出る。

〔三十九〕南風と北風の争いを嘲ってきたアペニン山脈の大木が、巨大な竜巻によって周囲の樹木を投げ倒しつつ遂に倒れるように、ラティンは倒れるものの、その際におのれの手の届くところにいた複数の者たちを道連れにする。死を前にしてもなお殺戮を続けようとする、勇ましい武者ラティンにふさわしい最後である。

〔四十〕憎しみを露わにして、スルタンが長らく抑えてきた人間の血への飢えを癒している間に、〔ソリマーノの奮闘に〕刺激を受けたアラブ兵たちも、キリスト教軍の軍勢に壊滅的な打撃を与えている。おお残忍なるドラグッテよ、英国人のエンリーコとバイエルン人のオリフェルノがおまえの剣によって殺され、レーノ川流域で生まれたジルベルトとフィリッポの命がアリアデーノによって奪われた。

〔四十一〕アルバザールはこん棒でエルネストを打ちのめし、オットーネは剣で斬られてアルガゼッレの足元に倒れる。だが、騎士達がどのようにして殺され、身元不明の兵士達が何人くらい死んだかなど、誰が語り尽くすことができようか。ゴッフレードはというと、歩哨たちの叫び声を聞いた時から、眠ることなく、動きまわっていた。すでに武具を身に付け、すでに大勢の兵士達を招集して、すでに幕営から外に出ようとしていた。

〔四十二〕叫び声に続いて、異常に喧しい紛争の音を聞いて、ゴッフレードはアラブの盗賊集団が不意打ちを掛けてきたことを悟った。アラブ人たちが周辺の諸地方を荒らしまわっていることはすでに司令官の耳に入っていたが、臆病きわまりないかれらが大胆にもキリスト教軍を襲うとは思っていなかった。

〔四十三〕さて、そのゴッフレードは襲撃の現場へ急いで向かおうとするが、その時、別の方向から突然「武器を取れ、武器を取れ」とい

う叫び声と、直後に荒々しい怒声が空に不気味に反響するのを聞く。エルサレム王の軍勢を率いて攻め込んでくるのはクロリンダ、その横にはアルガンテもいる。司令官は自らの補佐を務める高貴な武将グエルフォに向かって言う。

〔四十四〕「聞こえるだろう、丘の上の町のほうで、物凄い音がするのを。敵の来襲を食い止めるために、そなたの武勇と剣が必要だ。されば、そなたはあそこへ行って、防戦につとめるのだ。私の兵士達の一部を連れて行くがよい。その間、私は残りの兵士達を引き連れてもう一つの戦線に向かい、敵の勢いを挫く。」

〔四十五〕こう取り決めると、両者は同じ武運に導かれて、異なった道を進み始める。グエルフォが丘を目指したのに対し、ゴッフレードはいまやアラブ人たちによって制圧された場所へと向かう。だが、ゴッフレードの軍勢は道すがら次々と新たな兵士達を迎え入れ、次第に増強されていき、かの残忍なトルコ人〔ソリマーノ〕が血で染めた場所に着いたときには、きわめて強力な軍団となっていた。

〔四十六〕こうして勢いづいたゴッフレードの軍勢はさながらポー河のようであった。ポー河は源流がある山を慎ましく下るときには狭い河床を水で満たさないが、水源から離れれば離れるほど〔多くの支流から〕新たな力を得て横暴になり、破壊された堤防の上で雄牛のごとき頭をもたげ、おのれが勝利者であると言わんばかりに周囲を水浸しにする。そして多くの角を出して〔河口を作って〕アドリア海に立ち向かい、その様は海に貢物を捧げるというより戦いを挑むかのようである(四)。

〔四十七〕ゴッフレードは自らの兵士達が恐れをなして逃げるのを見て、かれらに厳しい態度で迫り寄る。「何を怖れるのか?」、かれは叫ぶ、「どこへ行くのか?おまえたちを追い立てている連中が誰であるか、少しでも考えてみたのか?面と向かって相手から傷つけられることも、相手を傷つけることもできない臆病な集団に、おまえたちは追い立てられているのだぞ。奴らはおまえたちの顔が自分たちのほうに向けられているのを悟った途端に、戦うことができないほど怖気づいてしまうのだぞ。」

〔四十八〕こう言うと、馬に拍車をかけ、ソリマーノが炎を散らしたと思われる場所へと向かう。辺りには粉塵が立ち込め、血がこびりつき、武器が散乱し、死臭が漂い、危険も潜んでいたが、その中を進むゴッフレードは、進むことが困難なときには剣を振り回して、あるいは馬で突進して進路を切り開き、敵の隊列を切り崩し、自らの両側にいる敵の騎士もその馬も、武装した敵もその武器も、すべてめちゃくちゃになぎ倒した。

〔四十九〕おぞましい虐殺の犠牲となり、ばらばらに重なって転がっている者たちを飛び越えながら、〔ゴッフレードが乗った馬は〕先へと進む。猛烈な勢いでゴッフレードが近づいて来るのを察知して、豪放なるスルタンは逃げようとも、拒もうともせず、それどころかゴッフレードのほうに進んでいき、高く掲げた剣で斬らんとばかりに迫る。おお、この二人の騎士は運命によって、決闘で雌雄を決するために、それぞれ世界の果てから呼び寄せられたのだ。

〔五十〕アジアの大いなる支配をかけて、狂気と武勇とがいまこの狭い決闘の場でぶつかり合う(五)。両者が剣をどれほど強烈に、かつ迅速に振り下ろしたか、また両者の戦いがどれほど壮絶であったか、誰

がそれを語ることができようか。この時に繰り広げられ、かの黒い大気が包み隠してしまった壮絶きわまる合戦について、私はここで語らないものの、それは明るい太陽の光で照らされ、すべての人々が一堂に会して見るに値する。

〔五十一〕ゴッフレードに導かれ、いまや闘志を取り戻したイエスの戦士たちも、戦いの場へと進み出て、中でも腕利きの男たちが一団となって、殺人鬼のごときスルタンを取り囲み、追い詰めようとする。異教徒よりもキリスト教徒のほうが、あちら側にいる者たちよりもこちら側にいる者たちのほうが沢山の血で地面を染めているとは限らない。両者とも勝者となったり敗者となったりして、同じように相手を倒したり、相手によって倒されたりする。

〔五十二〕同じくらいの勢いと力をもって、こちら側から来る北風とあちら側から来る南風とがぶつかり合うとき、どちらの側の風も、どちらの側の空も、どちらの側の海も互いに譲らず、一方の側の雲は他方の側の雲と、一方の側の波は他方の側の波と争うが、それと同じように、長々と続く激しい戦闘はいたるところで一方の側が他方の側に屈せず、楯と楯とが、兜と兜とが、剣と剣とがぶつかり合う過酷な密集戦と化す。

〔五十三〕もう一方の前線でも同じ頃、大勢の兵士達が入り混じって、やはり壮絶な戦いが繰り広げられている。雲のごとき千以上の悪魔たちが広大な空を完全に埋め尽くし、異教徒たちを鼓舞して、退却に転じようとする者が出ないようにする。アルガンテは内に秘めた炎によってすでに士気を高めていたが、〔アレットが手にする〕地獄の松明はそのアルガンテをさらに燃え上がらせる。

〔五十四〕アルガンテも〔ソリマーノに負けじと〕周囲にいる〔キリスト教軍の〕警備兵を敗走させ、〔キリスト教軍の〕陣営の周りに張り巡らされた塹壕の中に跳ね入ると、塹壕を埋めるほど多くの敵を殺す。〔塹壕が死体で埋まったことよって〕地面の窪みがなくなり進撃が容易になると、他のイスラム兵士たちがアルガンテの後に続き、最初に目にしたいくつかの敵の天幕に血の紅を塗った。アルガンテと並んで、あるいはアルガンテに少し遅れてクロリンダが行く、二番手に甘んじたことを不服としつつも(六)。

〔五十五〕フランク人たちが退却し始めたとき、グエルフォに率いられた軍勢が時宜よくその場所に到着し、フランク人たちを元の場所へ引き戻すとともに、邪悪な民の蛮行を阻止させた。戦いがこうして続いている間、こちら側の戦場でも、あちら側の戦場でも、夥しい血が流された。天界の王が自らの座から残酷な戦いのほうへ目を向けたのはその時であった。

〔五十六〕善であり、正義である神はいと高きところに――その神の座があるところ〔至高天〕は狭い地上世界の限られた空間の上方に拡がる、人間の感覚や理解を超えた場所である――座し給い、そこから全てを取り仕切り給い、造りだし給い、飾り給うていた。永遠なる厳めしき王座についた神は、三つの光を伴った一つの輝きの中で輝き給い、その足元には神の僕である宿命と自然と運動と時間がいて、

〔五十七〕さらには空間とかの女神――すなわち地上の栄光や富や王国を神の意に沿うように、煙や塵のごとく、消失させたり移動させたりする運命の女神――もいるが、かのじょは女神であるから、われわれ人間の怒りなど気にもかけない。この場所で神は自らの輝きに包ま

れ給うているので、聖人達でさえその姿を見れば目が眩んでしまう。神の周りには多くの天使たちがいて、天使たちは神の恩寵を皆が同じだけ受けているわけではないが、皆が幸いなる存在である。

〔五十八〕聖なる歌の響きに天の王宮が晴れやかに唱和する。神は自らのもとに大天使ミケーレを呼び寄せ給うと、煌めくダイヤモンドの剣を手にし給い、燃えるかのごとく輝くこの天使に向かって言い給う。

「余に仕え、余が愛する者たちに対して、地獄の邪悪な悪魔たちが戦いを仕掛け、世界を混乱に陥れようとして、地下深くにある破滅の地から抜け出てきているのが見えるだろう。

〔五十九〕行くのだ、悪魔どもに言うのだ、戦は戦士たちが為すものなれば、戦に手を出すことはすぐに止めよ、と。生きた人間たちの世界を、天に支配された清らかな空間を乱し、汚すな、と。アケロン河の闇へ戻れ、と。そこが奴らにはふさわしい居所であり、奴らはそこで定められた罰を受けなければならないのだから。そこで自らや地獄にいる魂らに苦しみを与えればいいのだ。これは余が発する命令であり、決定なのだ。」

〔六十〕神がこう述べ給うと、羽を抱いた戦士たちの長（七）は聖なる足元で丁重に一礼し、金色の羽を広げて大空に向かって飛び立ち、人間の思考さえも超えるほどの速さで進んだ。幸いなる人々が不動の輝かしき座を構える炎と光の圏〔至高天〕を通過し、純なる水晶天と、それとは逆の方向に回る、宝石のごとき星ぼしを抱いた環〔恒星天〕を見つめる。

〔六十一〕その先では、他に与える影響においても外見においても特異な土星と木星が、さらには――天使たちの力を受けて動いているのだから惑星と呼ばれるべきではない（八）――他の星ぼしが、左から〔西から東へ〕回っているのを見る。そして永遠なる光に浴する幸いなるこれら諸天に続いて、雷と雨がそこから降り落ちる場所〔火の圏と大気の圏〕を通り、あらゆる物が自らを破滅させたり養育したりする場所〔地球〕に――その地ではあらゆる物が争いの中で死と再生を繰り返す――に到着する。

〔六十二〕不滅の羽で濃い霧と不気味な闇を消散させながら大天使ミケーレはやってきた。神々しい光によって、その顔は輝きを放ちながら浮かび上がり、夜も金色に染まっていた。それは雨の後に太陽が雲の中にしばしば架ける美しい虹のごとき、澄み渡った空を裂いて大いなる母〔大地〕に落ちる流れ星のごとき。

〔六十三〕だが、地獄の邪悪な群れが異教徒たちを扇動し、その狂気を煽っている場所に来ると、立ち止って頑強な羽で体の均衡を保ち、槍で威嚇しながら、かれらに向かって言った。「おまえたちはいまや解さなければならない、世の王〔神〕がいかに恐ろしい雷電をもって怒りを表し給うかを。恥辱にまみれ、厳罰を受けてかくも悲惨な状態にありながら、おまえたちはまだ尊大な態度をとるのか。

〔六十四〕天において定められているのだ、聖なる旗にシオンの城壁が屈して、その城門が開けられることは。なぜ天の決定に逆らうのか。なぜ天の法廷の怒りをかおうとするのか。戻るがよい、呪われた者ども、おまえたちの国へ、罰と永遠の死に支配された国へ。おまえたちに割り当てられたかの囲いの中で、おまえたちは争い合い、勝利を追い求めるがよい。

〔六十五〕その場所でおまえたちは荒れ狂い、叫び声や歯ぎしりの音

が響くところで、鉄の責め具や鎖を振り回したり軋ませたりしながら、罪人たちを存分に苦しめるがよい。」このように言ったが、悪魔たちの中になかなか立ち去ろうとしない者がいると、聖なる槍で突いたり、叩いたりした。悪魔たちは太陽と金色の星ぼしが光を投げかける美しい地上世界から離れることを嘆きつつも、

〔六十六〕罪人たちに通常より激しい痛みを与えるべく、地獄へ向かって飛び立った。温暖な気候を求めて海を渡る鳥たちでさえ、これほど大きな群れを作ることはない。秋になって寒さが到来したとき地に舞い落ちる枯れ葉でさえ、これほど沢山落ちはしない。悪魔たちから解放された世界は、その表面を覆っていたかの闇を消滅させ、喜びに包まれる。

〔六十七〕しかし悪魔たちが去って、アレットが炎をアルガンテの心に吹き込まなくなり、地獄がアルガンテの脇腹を鞭打たなくなっても、高慢なアルガンテは胸に秘めた闘志や狂気を募らせ続ける。一団となって進むフランク人の兵士たちに残忍な剣を振り回しながら近づき、相手の身分が低かろうが高かろうが関係なく斬りつけ、誇り高き武将たちを下位の兵士達と異ならぬ存在にする。

〔六十八〕近くではクロリンダがアルガンテに劣らず奮闘し、戦場を分断された四肢で埋め尽くす。ベルリンギエーリの胸に差し込んだ剣は生命が宿る心臓にまで達したが、きわめて激しい勢いを伴っていたので、血に塗られた剣は背中から外へ出た。そして〔クロリンダは〕勇ましいアルビーノに対しては赤子が最初に養分を得る部分〔臍〕を、ガッロに対しては顔を斬りつけた。

〔六十九〕先に自らが傷つけられていたジェルニエーロの右手を切断して地に落とすが、生気を失っていない右手はまだ剣を握り、指をひきつらせて地面を這う。それは切り離された蛇の尻尾が体を探して動き回り、体と結合できないのと同じよう。もはや戦えなくなった相手から離れると、アキッレに向かって剣を振り落とし、

〔七十〕首と脊髄の間に命中させる。首の腱が切られ、喉の気管も分断され、頭部が回りながら落ちていく。顔が不潔な土で汚くなり、それから胴体が地面に落ちたが、胴体は鞍に座ったまま（そのおぞましい姿は見る者の憐れみを誘う）。手綱を持つ者がいなくなった馬は何度もひずめで地面をかきながら回転し、胴体をふりおとした。

〔七十一〕さて、無敵の女戦士〔クロリンダ〕がこのように西洋の軍勢を敗走させ、打ちのめしている間に、その女戦士の仲間であるサラセンの戦士たちに対して、その女戦士に劣らず無慈悲な殺戮を他方において行っていたのが勇敢なジルディッペである。ジルディッペも女戦士であり、クロリンダには闘志においても、武勇においても負けていなかった。しかし運命は二人に果たし合いの機会を与えず、より強力な相手と戦うように定める(九)。

〔七十二〕ひとりがこの方で、もう一人があちらの方で敵に迫り、攻撃を仕掛けるが、敵の分厚い密集を突破することはできない。だが、高貴なるグエルフォがそのときクロリンダに剣を向け、かのじょに近づく。振り下ろされた剣はクロリンダの美しい脇腹の血で少し染まるが、対するクロリンダも相手の肋骨と肋骨の間に仕返しの突きを容赦なく入れる。

〔七十三〕傷つけられたグエルフォは報復を試みるが、グエルフォの剣はクロリンダではなく、偶然通りがかったパレスティナ人のオズ

ミーダに当たり、自らが受けるはずではなかった太刀を受けて、この男は顔を切り裂かれる。いまやグエルフォの周りにはグエルフォ自身が引き連れてきたキリスト教軍兵士達が大勢駆けつけ、イスラム側の兵士達も集まってきたので、それらの者たちが入り混じって、戦いは乱闘と化す。

〔七十四〕その頃夜明けの太陽は、赤々とした美しい顔を天上のバルコニーの上にすでに現していた。かの猛々しきアルジッラーノ（十）はこうした騒動の中で牢から脱出する機会を得て（十一）、たまたま手に入れた武具を（その状態の良し悪しは問題にせず）急いで身に付けると、先頃の不面目を払拭するに十分な輝かしい武勲と栄誉を得るべく、戦場に向かいつつあった。

〔七十五〕戦いのために飼われている馬は、王宮の馬屋から逃げ出して自由の身になると、広々とした道を通って家畜の群れがいるところへ、あるいは慣れ親しんだ川辺や牧場へと向かう。たてがみを首のところで楽しそうに風に靡かせ、両肩で頭を誇らしげに高くもたげ、ひづめの音を高らかに響かせながら進むその姿は、周囲の野に反響するいななきと相俟って、炎に包まれているように見える。

〔七十六〕アルジッラーノはその軍馬のごとき容貌でやって来る。険しい目つきはギラギラと輝き、顔には自信と誇りがみなぎり、足取りは軽く速いので、地面に足跡がほとんど残らない。敵兵たちがいるところに達すると、何をするにも憚らず、遠慮もしない男のごとく大きな声を張り上げて言う。「おお、臆病極まりない世の屑どもよ、愚鈍なるアラブ人どもよ、おまえたちはどうやって、かくも大胆不敵に戦う術を会得したのか。

〔七十七〕おまえたちは兜や楯の重さを支えられないためか、胸や背を武具で覆うことを常としないためか、怖がりなのに武装もせずに、攻撃を風に託し、逃げることを防御の手段にしている。おまえたちが行動するのは夜で、立派な研究をするのも夜だ。闇におまえたちは助けられている。闇がない今、誰に助けてもらうのか。その者は武勇と闘志の両方において、おまえたちより優れていなければならないぞ。」

〔七十八〕まだこう言い終わらないうちに、アルジッラーノはアルガゼルの喉もとに強烈な一撃を浴びせ、その声帯を破壊し、返答のために発せかけられた言葉を途中で断った。この哀れな男は突然の魔に襲われて視力を失い、骨に凍るような悪寒が走るのを感じ、倒れこむが、死が迫る中で怒りに震えつつ、おぞましき土を歯で噛む。

〔七十九〕アルジッラーノは続いてサラディーノとアグリカルテとムレアッセをさまざまな方法で殺し、かれらの近くにいたアルディアジルの腹の片側から反対側までを一振りの太刀で引き裂く。アリアディーノに対しては胸の上部に剣を突き刺し、倒れた相手に向かって辛辣な言葉を吐き、相手を侮辱する。瀕死のアリアディーノは重たい眼を剥いて、自分を罵った男に向かって言う。

〔八十〕「おまえが誰であるにせよ、俺を倒したことをおまえが誇っていられる時間は長くないだろう。俺と同じ運命をおまえは辿ることになる。俺より強い者によって倒され、俺の傍で横たわるだろう。」アルジッラーノは冷酷な笑みを浮かべて言った、「俺の運命を定めるのは天だ。おまえはいまここで死に、鳥や犬の餌になるがよい。」それから足でこの男を踏みつけ、剣と魂をこの男から奪う。

〔八十一〕スルタンの小姓は射手たちや投石兵たちの集団に交じって

いたが、その美しい顎には若さの象徴である髭がまだ生えていない。頬には真珠や露と見間違えるような生温い汗が流れ、埃はもじゃもじゃの髪に愛らしさを、怒りを含んだこわばった表情は顔に甘美さを加えている。

〔八十二〕小姓が跨る馬はアペニン山脈に降り注いだばかりの雪にも匹敵するほど白く、その俊敏で軽やかな動きは、渦を巻く竜巻や空に向って上がる炎を凌ぐほど速い。小姓は槍の中央部を握って槍を振り回す。腰のところに湾曲した短剣を下げているが、赤と金色の織糸で異教的な装飾が施された鞘に収められたその短剣を煌めかせる。

〔八十三〕小姓はいまだ味わったことのない武勲の喜びを勝ち得たいと願い、あちらこちらで敵の兵士達に挑もうとするが、その挑戦を多少なりとも受けて立とうとするキリスト教軍兵士は誰もいない。そのような状況の中でアルジッラーノは、動きまわる小姓を槍で突こうとして注意深くその行動を観察する。機を捉えて小姓が乗った馬を急襲して殺すと、地面から起き上がろうとする少年の前に立ちはだかり、

〔八十四〕懇願する少年の顔に向かって非情な腕を――それは憐れみを乞う少年の抵抗を空しくする腕――残酷にも振り下ろし、自然が生み出した至高の美を傷つけた。ところが剣は人間よりも人間的な感情を宿していたとみえ、振り下ろされたときに向きを変えて、平らな面を下にした。しかしそれが何の役に立ったと言うのか。残忍な剣は再び少年に向けられ、最初の試みに際して傷つけられなかったところを突き刺したのだから。

〔八十五〕ソリマーノはその場所からあまり離れていないところで、ゴッフレードを相手に戦っていたのだが、少年に危険が迫っていることを察すると戦うのをやめ、馬を転回させて、疾走させる。兵士達をかき分けて剣を振り回して進むが、到着したソリマーノに課されるのは救助ではなく、復讐への着手なのだ。悲しみをもってかれが見たのは、殺されて地面に横たわるおのれの小姓、摘み取られた可憐な花のごときレスビーノであるが故。

〔八十六〕震える両眼からかくも優美に力が抜け、首が後方へ垂れる様を、ソリマーノは見つめる。青白くなった顔は何と美しいのか。死へと向かう表情からはこの上なく甘い憐れみの念が湧きあがり、それまでは石のように硬かったソリマーノの心は溶けていった。怒りを含んだ涙がほとばしり出た。おまえは泣いているのか、ソリマーノよ。おのれの国が滅ぶのを見たときでさえ泣かなかったおまえが。

〔八十七〕だが仇である男の剣がまだ少年の血で濡れ、その温もりを帯びているのを認めるやいなや、憐れみの念は薄れ、燃え上がるような怒りがこみ上げて、涙は胸の中で淀んだ。アルジェッラーノのもとに駆け寄り、剣を振り上げると、相手が突き出した楯を、そして兜をそれぞれ破壊し、続いて胴体と喉を引き裂く。怒りが大きいからこそ、これほど激しい一撃を与えるのだ。

〔八十八〕それだけでは満足せず、馬から降りると、アルジェッラーノの死体を傷つけようとする。その様たるや、猛犬が自分をひどく傷つけた石に、怒りを露わにして噛みつくよう。ああ、苦悩がいかに大きいとはいえ、感覚が失われた肉体を攻めることで、いかなる慰めが得られるというのか。その頃、フランク人の司令官は〔ソリマーノとは対照的に〕、おのれの怒りを無駄に露わにしたり、攻撃を無駄に仕掛けたりしていなかった。

〔八十九〕ゴッフレードが相手にしていたのは、鎧、兜、楯で武装した大勢のトルコ人たちであった。かれらは困難に屈しない強靭なに暗いと勇猛な精神をもち、百戦錬磨の熟練兵たちである。かつてはソリマーノの警護を引き受け、逆境にあってもソリマーノへの忠誠を捨てず、アラビアの砂漠をソリマーノが不幸にも放浪した際にも行動を共にした。

〔九十〕かれらは密なる連携のもとで隊列を組み、その武勇たるやフランク軍に劣らず、劣ったとしてもわずかに劣るだけであった。かれらに攻勢をかけるゴッフレードは、荒々しいコルクッテの顔を斬り、ロステーノの脇腹を傷つけ、セリンに対してはその頭を肩から切断し、ロッサーノの右手と左手を斬り落とした。これらの者たち以外にも、多くの者たちにさまざまな傷を負わせ、多くの者たちの命を奪った。

〔九十一〕このようにゴッフレードがサラセン人たちを攻め、サラセン人たちの攻撃に耐えている間、異教徒たちは運命に見放されたとも、希望が失われたとも思っていなかったが、見よ、戦いの光明たちを内に抱いた見慣れない塵の雲が近づいてくるのを（十一）。見よ、誰も予想しなかった武器の輝きがそこから発せられ、異教徒たちの軍勢を驚かせるのを。

〔九十二〕かれらは五十人の武者たち（十二）で、勝利の赤十字が純白の布地に描かれた旗を掲げている。私が百の口と言葉を有して、鉄のごとき声と息とを有していたとしても、数回の猛襲で多くの異教徒たちを殺したこの強力な軍団について語りつくすことはできないだろう。闘志を欠いたアラブ人たちが倒され、抗戦した強きトルコ人たちもやはり打破される。

〔九十三〕あたり一面で恐ろしく、残酷で、おぞましく、忌まわしい光景が展開される。勝ち誇った死神があちらこちらを多様な形相で動き回り、血の海を波立たせているのが見えるだろう。王〔アラディーノ〕は形勢が不利になったことを見てとったかのように、部下たちの一部を引き連れて城門から外へ出た。そして高台に上がると、眼下に広がる平原を見渡し、結果がどうなるか分からない戦いに注目した。

〔九十四〕だが最大の軍団が壊滅していくのを見届けると、全軍に対してただちに退散するよう命令し、アルガンテとクロリンダのもとにも繰り返し伝令を送って、街の中へ戻るように懇願する。勇ましき男女は敵の血で酔い、怒りで判断する力を失っていたので王の要求に応じようとしないが、最後には譲歩して、ばらばらに敗走する自軍の兵士達を少しでも集めると、落ち着いて撤退するよう指示する。

〔九十五〕だが、これらの兵士達を統率し、かれらの恐れや震えを取り除くことができる者などいるだろうか。かれらは逃げると決めたのだ。だから楯を捨て、剣からも手を離すのだ。楯はかれらにとってもはや身の安全に資するものではなく、妨げとなるものなのだ。平原と街との間には険しい谷が西から南に向かって広がっているが、兵士達はその谷間に逃げ込み、灰色がかった粉塵の雲も城壁の方へ伸びていく。

〔九十六〕イスラム軍兵士たちは我先に坂を駆け下りていくが、キリスト教軍兵士達がかれらに追い打ちをかけ、凄まじい殺戮を行う。イスラム軍兵士の中には坂を上って、イスラム王の軍勢が待ち受けているところまで到達する者もいる。グエルフォは急な坂を上ることが不利になると判断して、部下たちに対して追撃をやめるように指示する。

イスラム王は自軍の兵士達を街の中に迎え入れるが、戦いで敗北した割には多くのイスラム軍兵士達が生還した。

〔九十七〕その頃スルタンは、人間の力をもってやれることはすべてやったと感じていたものの、今では何ひとつできないほど茫然自失の体となっていた。全身が血と汗にまみれ、しばしば重苦しい咳をして脇腹を震わせる。楯の重さに耐えられなくなった腕をだらりと垂らし、右手で握った剣をゆっくりと回して空中で輪を描く。剣は傷み、切れなくなり、ただの棒と化して、剣本来の役割を果たすことができなくなった。

〔九十八〕これほどまでに意気消沈したソリマーノは、二つの選択肢を前にして〔いずれを選ぶべきか〕迷う男のように立ちつくし、自ら命を絶つことによって大きな手柄に対する称賛が敵軍の誰かに与えられることを自らの手で阻むべきか、それとも自らの軍勢が壊滅しても自らの命が失われないようにするべきか、考え抜いた末に言った。「運命が定めるところにわしは従おう。わしの逃避によって、運命が勝利を得ることを願おう。

〔九十九〕キリスト教軍の連中はわしが背を向けて逃げるのを見るがよい、不本意にも敗走を余儀なくされた我々を、もう一度嘲笑うがよい。わしが再び武器を取り、やつらを慌てさせ、不安定な基盤の上に作られたやつらの国家を滅亡させるときに、わしの姿をやつらは再び見ることになるのだから。わしは決して降参しないぞ。わしが受けた辱めはけっしてわしの記憶から消えないし、やつらに対するわしの怒りも永遠に消えないのだ。わしはまずます凶暴な敵となって、いつだってやつらの前に現れるぞ、死んで埋葬され、肉体を失った霊となっても。」

第十歌訳

〔一〕こう言い終わらないうちに、ソリマーノは自分の近くを、一頭の彷徨う馬が通るのを見た。誰にも御されていない馬の手綱を握ると、たいそう疲れていて、負傷した身ではあったが、馬の背に飛び乗った。ソリマーノの兜にそびえていた不気味な兜飾りは今や失われ、兜自体の威厳も失われている。外衣もずたずたに裂け、王であることを示す華麗な装飾は何一つ残っていない。

〔二〕羊小屋を追われた狼は、ときに逃げつつ、自らの習性――大きな腹の中にある貪欲で、飽くことのない胃袋をすでに満たしていても、なお血に飢えて舌をだらりと垂らし、汚れた唇を舐めるという習性――を隠してやってくる。ソリマーノもまた、血なまぐさい殺戮を行ったにもかかわらず、底知れぬ食欲がまだ満たされていないと感じつつ進んでいた。

〔三〕自らの周りで音を立てながら飛び交う雲のごとき数多の矢、無数の剣、無数の槍、こういった人を殺傷するための道具から、おのれがいまや離れる運命にあるとも感じつつ、できるだけ人の気配がなく、人に知られていない道を人目に触れないように歩き、何をしなければならないか思案に暮れるかれの心は、苦悩の激しい嵐に波を打って揺れる。

〔四〕エジプト王が強力な軍団を配備しているところへ行き、エジプト王の傘のもとで戦い、新たないくさにおいてもう一度おのれの命運を試そう、最後にはこのように決意する。決めてしまえば、すぐに計

画を実行に移すべく、目的地に通じている道を進み始める。古都ガザの砂浜に到達するための行路は知っているので、誰かに導かれる必要はない。

〔五〕傷の痛みが増し、体が重く、病んでいると感じてはないが、それでも休憩したり、武具を体から外したりすることはある。だが、昼間は疲れをもろともせずに進み続ける。そして夜の闇が周囲のさまざまな物を見えにくくして、あらゆる色を黒に変える時間になると、馬から降りて、傷に包帯をして、高い椰子の木を力の限り揺すって実を落とそうとする。

〔六〕椰子の実を食べた後、疲労困憊した軀を地面の上に横たえ、頭を固い武具の上に置くことによって、打ちひしがれた心の動揺を鎮めようとする。だが、傷の痛みを以前にも増して感じるようになり、加えて怒りと苦悩という体の中に潜む禿鷹が、かれの胸を食い荒らし、心を引き裂く。

〔七〕夜が深まり、周囲のあらゆる物が静寂に包まれる頃になって漸く、疲れて弱り切ったソリマーノはおのれにのしかかる耐えがたき苦悩を忘却の河〔眠り〕の中で和らげ、短く、物憂い静寂の中で傷ついた身体と病んだ眼を回復させた。そして眠りからまだ覚めないうちに、次のように語る厳めしい声を耳元で聞いた。

〔八〕「ソリマーノよ、ソリマーノよ、ゆったりと居眠りをするのは事態が好転してからにせよ。おまえがかつて君臨した国は、異国の者たちに支配され、いまだ隷属を余儀なくされている。おまえが居眠りをしているこの土地には、おまえの部下たちの遺骨が埋葬されないまま散らばっているのを忘れたのか。おまえが敗北した跡がはっきりと残されているこの場所で、何もしないで新たな日が巡りくるのを、おまえは待っているのか。」

〔九〕眼を覚まし、視線を上げたスルタンは、非常に年を取っているように思われ、手にした曲がった杖でふらつく老いた足を支え、まっすぐに保っている男の姿を認める。「おまえは誰だ」、むっとしてソリマーノは男に尋ねる、「居眠りを少ししている旅人を叩き起す迷惑な亡霊のようなおまえは。わしの恥とわしの復讐がおまえに何の関係があると言うのか。」

〔十〕老いた男は答える、「私はあなたが先程決心されたことを或る程度知っております。そして、あなたがおそらく思っておられる以上に、私はあなたのことを考えているからこそ、あなたのもとへ参りました。私は厳しいことを申しましたが、それはあなたがおっしゃるほど無駄なことではありません。怒りによって武勇は磨かれるのですから。どうか私の言葉を聞き入れてください、わが主君たる方よ、それはあなたが迅速に勇気を奮い立たせるために必要な鞭となり、拍車となるのですから。

〔十一〕さて、もし私の推測が正しければ、あなたはエジプトの王のもとへ行こうとされているようですが、その計画をあなたが実行されるなら、無益に困難な旅をされることになるとわたしは予想するのです。と申しますのも、あなたが行かなくとも、サラセン人の軍団がやがて組織されて、〔エルサレムに向かって〕行軍を開始すると思われるからです。あなたが我々の敵を相手に戦い、武勇を証明することができるのは、その地〔エジプト〕ではないのです。

〔十二〕しかし、もしあなたが私を案内者とするならば、あなたに約

束しましょう。ラテン人たちに周囲を取り囲まれたかの城壁の中へ〔エルサレムの町の中へ〕、私は昼の明るい時に、あなたに剣を抜かせることなく、あなたを必ずやお連れ致します。エルサレムであなたは紛争や騒動を伴った激しい対立を目の当たりにするでしょうが、その経験はあなたに栄光を付与し、あなたにとって喜ばしいものなのです。エジプトの軍勢が到着して戦いが新たな局面を迎えるまで、あなたはエルサレムの町を死守するのです。」

〔十三〕老人がこのように話している間、凶暴なるトルコ人は老人の眼や声を注意深く観察する。かれの顔と勇ましい心からは、いまや誇りと怒りが完全に姿を消している。「父なる方よ」、ソリマーノは答えた、「わたしはあなたにすぐにでも従います。あなたがお望みのところへ、私を向かわせてください。その場所が苦難と危険で満ちていればいるほど、そこへ私を差し向けてくださるあなたの忠告は私にとってありがたいものとなるでしょう。」

〔十四〕老人はソリマーノの返答を聞いて嬉しそうにする。そして〔ソリマーノの〕傷が夜風の冷たさによって悪化したので、自らが所持する液体を患部に振りかける。するとソリマーノに気力が蘇り、出血が止まり、傷口が塞がる。すでにアポロン〔太陽〕は曙によって薔薇色に染められた空を金色に輝かせていたが、それに気づいた老人は言った。「出発の時間になりました。すべての生き物を仕事へと向かわせる太陽が、もう我々に進むべき道を示しているではありませんか。」

〔十五〕そこからあまり離れていないところに、老人は一台の車を停めていた。その車に凶暴なニケーア人を連れて乗り込むと、手綱を弛め、〔車を引く〕二頭の馬を慣れた手で交互に鞭打つ。車はあまりにも速く進むので、地面の砂に車輪や蹄の跡を残さない。馬の体から湯気が立ち、息を切らして走る馬の轡が〔呼気がつくる〕泡によって白くなっているのが見える。

〔十六〕驚くべき話をしよう。車の周りでは一片の大気の塊が形成され、その雲は車に付着し、大きな車全体を包んで覆ってしまうが、雲自体は外から全く見えないのだ。破壁車から投げられた石も、分厚く密なる雲を貫通することができない。しかし車の中にいる二人は、自分たちを取り巻いている霧や〔雲の外に広がる〕晴れ渡った空を雲の切れ目からはっきりと見ることができる。

〔十七〕騎士は驚きのあまり、眉を吊り上げ、額に皺をよせ、目を凝らして雲と、あらゆる障害物を乗り越えて飛ぶように速く進む車とを見る。もう一人の男は、ソリマーノの顔がこわばっているのを見て、かれが仰天していることを悟り、ソリマーノに呼びかけることで途切れた会話を再開しようとする。ソリマーノは頷いて自分が大丈夫であることを老人に伝えると、次のように言う。

〔十八〕「あなたの正体を私は存じませんが、あなたは自然界を操って、人間の常識を超えた高邁で、不可思議なことをなさいます。人間の心のもっとも深いところに自由自在に入り込んで、その秘密を暴かれます。天から吹き込まれた知識をもって、もし将来の、それもずっと未来のことまで見通せるとおっしゃるのなら、どうか私に教えてください。アジアで繰り広げられている戦争に、天はいかなる平和を、あるいは、いかなる破滅を与え給うのでしょうか。

〔十九〕しかし、その前に、あなたのお名前をおっしゃってください。それから、いかなる魔術によって、あなたがまことに驚くべき奇蹟を

起こされるのか教えてください。私が驚きから解放されることなくして、あなたの他のお言葉を解することができると、あなたはお考えなのでしょうか。」老人は微笑み、言った。「あなたの望みの一部を叶えることは、私にとって容易いことです。私はイズメーノと申しますが、シリアの人々は交霊術に私が関心を持っておりますので、私のことを魔術師と呼んでいます。

〔二十〕しかし、未来を解き明かし、隠された運命が記された永遠の年代記を読んで欲しいという、あなたの私に対するその願いはあまりにも大胆で、その要求はあまりにも野心的です。地上にいる各人は、災いや悪を乗り越えて進むために、汗を流し、知恵を絞らなければならないのです。賢者や強者が自らの幸いなる運命の鍛冶屋にしばしばなるのは、そのためなのです。

〔二十一〕あなたの無敵の右手は、荒々しい者たちが激しく攻め立てている場所を補強し、守備するのみならず、フランク人の軍勢を容易に壊滅させることができるのですから、敵が仕掛ける攻撃や敵が放つ火に対して、あなたはその右手で応戦するのです。奮い立ち、耐えて、勝利を信じるのです。私はあなたの成功を期待しています。しかし、あなたの願いに答えたいと思うが故、霧の向こうにある物体のように、ぼんやりとしか見ることができないことを申し上げることにしましょう。

〔二十二〕私には見えるのです、否、見えるように思われるのです、永遠の偉大な惑星〔太陽〕が長い年月にわたって回転する前に、優れた功績故にアジアの民に崇拝されることになる男（十三）によって、肥沃なエジプトが支配されるのが。この男が平時に得た芸術の保護者としての名声や、数多くの美徳――それらすべてを私は見ることができないのですが――について、ここで申し上げるのは控えましょう。あなたに言っておかなければならないのはただ一つのこと、すなわち、この男によってキリスト教軍の戦力が単に弱められるのみならず、

〔二十三〕〔キリスト教軍による〕不当な支配が決戦の場において根底から揺るがされ、戦いに敗れた〔キリスト教軍の〕生存者たちは海によってのみ守られた狭い土地に避難することになるということ（十四）。この男はあなたの血を受け継ぐ者でしょう。」こう言うと高齢の魔術師は黙り、ソリマーノが話し始めた。「ああ、この男は幸いなる者、多くの栄誉を受けるべく選ばれたのだから。」こう言って、この男のことを少し羨ましく思ったが、同時に少し嬉しく思った。

〔二十四〕ソリマーノはさらに言った、「回るがよい、運命の女神よ、幸いがもたらされるか、不幸がもたらされるかは、天の定めによるのであり、あなたに私の運命を決める権限はない。あなたの前に私はつねに不屈の男として現れるだろう。私が自らの進むべき道から一歩でも外れるより前に、月や星ぼしが自らの軌道から外れるだろう。」このように言いながら、ソリマーノは燃えるような情熱の火花を飛ばした。

〔二十五〕二人はこのように話しながら進み、やがてキリスト教軍の天幕が張られている場所に着いた。そこでかれらは何とおぞましく、凄惨な光景をかれらは目にしたことか！そこには何とさまざまな形で殺された人々がいたことか！スルタンの目に怒りを含んだ暗い影が差し、その顔は悲しみで歪んでいった。ああ、かれはどれほど無念だっただろうか、かつては怖れられたおのれの輝かしき軍旗が地面に散乱

しているのを見て。

〔二十六〕そして〔やはりソリマーノは〕見たのだ、フランク人たちが喜ばしげに戦場を歩き回り、おのれの戦友たち〔イスラム軍兵士たち〕の胸や顔をしばしば踏みつけ、横たわる〔イスラム軍兵士の〕遺体から武器や武具を尊大な態度で剥き取るのを。長い列なったフランク人たちが儀式を営んで、自軍の戦友たちの遺体に恭しく敬意を表するのを。ほかのフランク人たちが〔積まれた薪に〕火を放ち、アラブ人とトルコ人が混ざり合った遺体の山を炎で燃やすのを。

〔二十七〕ソリマーノは深いため息をついて、剣を鞘から抜くと、車から飛び出て、走って行こうとした。だが、年老いた魔術師が大声を発し、愚かな衝動に駆られたかれを引きとめて、宥め、再び車に乗せた。魔術師は車をあたりでもっとも高い丘に向けて出発させ、しばらく進むと、やがてフランク人たちの陣営から遠く離れたところへかれらは達した。

〔二十八〕車からかれらが降りると、車はたちまち消えた。二人は例の雲に包まれた状態で、谷の左手へと続く坂道を共に歩いて下り、東に向かって高きシオン山がその背を向けている場所に着いた。魔術師は足を止め、何かを探すかのような素振りをしつつ岸壁の方へ進む。

〔二十九〕そこには大昔に固い岩に掘られた洞穴がかつて口を開けていた。だが、長い間誰も入らなかったので、入口は今や塞がれ、灌木や草に覆われて隠されていた。魔術師は内部に入るのに邪魔な物を取り払うと、低い姿勢で体を曲げながら狭い道を進み、前方に伸ばした片手で先の様子を探りつつ、もう一方の手で王子〔ソリマーノ〕を導こうとする。

〔三十〕するとスルタンが言う、「このような隘路を、あなたはなぜ進もうとされるのでしょうか。どこに私は行かないといけないのでしょうか。これより進みやすい道を、もしあなたが許可してくださったなら、私は剣で切り開くことができたのですが。」「苛立った魂よ」、魔術師が答える、「嫌がってはいけません、強靭な脚を暗い道を踏み入れることを。武勲により今でも大きな称賛を受けているかの偉大なヘドロ王は、暗い道を通ることを常としていたのですから。

〔三十一〕私がその名を言った王は臣下の力を抑制しようとした時、この洞窟を掘らせたのです。そしてこの洞窟を通って、高名なる友人の名にあやかってアントニアと呼んだかの塔から、かの古い大寺院の玄関の中まで誰にも見られずに退くことができ、またそこから町の外に身を隠して出ることも、秘密裏に町にいる人を外に出したり、外にいる人を町の中に入れたりすることもできたのです。

〔三十二〕しかし、このひっそりとした暗い道の存在を知っているのは、生きている人の中では今や私しかいません。この道を通って、王〔アラディーノ〕が賢者たちや強者たちを集めて会議を開いているところへ行きましょう。王は自らに悪運が付くことを、おそらく必要以上に恐れているようです。あなたは助けを必要としている王のもとへ着いても、黙って話を聞いているのです。そして時を見計らって、雄弁に話し出すのです。」

〔三十三〕このように魔術師が言うと、騎士は巨体を狭隘（きょうあい）な洞窟に押し込めて、道案内の男の後について常に暗い道を進んだ。最初は二人とも頭を垂れて進んだが、この洞窟は奥へ進めば進むほど中が広くなるので、容易に奥のほうへと進めるようになり、すぐに暗い地下道の

中間地点の近くまで到達した。

〔三十四〕この時イズメーノが小さな扉を開けると、そこには今では使われていない階段があり、上から入ってくる弱く、かすかな光が射している。二人はその階段を進み、やがて地下の回廊に着いたが、それから上に昇ると明るく、立派な部屋があった。そこには陰鬱な顔をした人々に囲まれて、王笏を持ち、冠を頭に付けた王が陰鬱な顔をして坐っていた。

〔三十五〕凹凸のある雲の内部から、凶暴なトルコ人は周囲の様子を――ほかの誰からも見られずして――観察し、探る。同時に王の言葉に耳を傾けるが、飾られた王座に座った王は次のように言葉で話を始めた。「おお、わが臣下たちよ、過日はわが軍にとって誠に痛ましい日であった。大きな期待を余が寄せていた〔ソリマーノに率いられた〕援軍が壊滅し、いまや頼りにできるのはエジプト軍だけになった。

〔三十六〕だが諸君は分かっているだろう、身近に迫った危険とはちがって、〔エジプト軍に対する〕期待が現実からかけ離れたものであるということを。だから、諸君を余はここに集めたのであり、諸君には意見を皆の前で述べてもらいたいのだ。」こう言って王が黙ると、森の中で音を立てて通り抜ける風のような、ひそひそと話す低い声が周囲で漏れ聞こえる。だが、アルガンテが大胆かつ晴れやかな表情で立ちあがり、ひそひそと話す者たちを黙らせる。

〔三十七〕負けん気が強く、気性の激しい騎士の答えはこうだった、「おお、高潔なる王よ、なぜ私達を試されるのですか。誰にでも明らかなことを、なぜ問われるのですか。私達に言わせることが何の役に立つのですか。ともあれ、言わせていただきましょう、期待はもっぱら我々の中にのみあるということを。そして、もし武勇を貶めるものはないという説が正しいとしたら、我々は武勇でもって自らを武装し、王であるあなたにはその支援をお願いしましょう。武勇に求められる以上に、我々は自分の命に執着しません。

〔三十八〕私がこう申し上げるのは、エジプト軍の確かな援助を信じていないからではありません。私の王〔エジプト王〕が約束したことを私が疑うことは、容認されることではなく、正しくもないからです。私はここにいる仲間たちの数名の者のうちに宿っている不屈の精神を、すなわち、いかなる運命にも立ち向かう覚悟のもと、おのれの勝利を信じて、死を打ち負かすというかれらの決意を、見たいから、こう言うのです。

〔三十九〕ただこのようにだけ言った勇猛なるアルガンテは、確かでないことは言わないと決めた男のようであった。続いて威厳のある顔つきで立ちあがったオルカーノは名門の一族の出で、過去の戦では武勲をあげたこともあったが、若い女性と結婚してすでに子供を授けられ、父親としての、また夫としての愛情を示すことになった結果、今や闘志に欠ける男となっていた。

〔四十〕この男は言った、「おお、わが君主よ、雄弁な言葉に込められた熱情を私は非難しようとは思いません、その熱情が心の中に閉じ込められることに我慢ができず、また閉じこもろうともしない闘志から発しているというのであれば。雄々しきコーカサス人〔アルガンテ〕があなたに対して平素より過度に熱を帯びた話し方をしているとしても、かれは戦いの場においても同じ熱情を発揮しているのですから、それは許されて然るべきでございましょう。

〔四十一〕しかし、長い期間にわたってさまざまな経験を積まれたあなたは、この男が熱情ゆえに過激な発言をするときには、あなたのご判断をもって〔かれの軽率な言動を〕制御されなければなりません。遠方からやってくる援軍を待つだけの余裕が、危険に迫られた、否、すでに危険な状態に置かれた我々にあるのか、そして古い城壁と新たに建設されつつある城壁によって敵の戦力と勢いに抗することができるのか、あなたは見極められる必要があるのです。

〔四十二〕我々は（もし私に自分の思うことを言う権限が与えられるなら申しますが）地形によっても、城壁によっても守られた町の中にいます。しかし敵は破壊力のある大きな装置を作ろうとしています。どんなものであるかは分かりません。軍神が下す勝敗の行方は定かではないものの、私は期待する反面で、心配もしています。もし敵の襲撃が我々をさらに窮地に追い詰めるならば、我々の食料がいずれ尽きること。

〔四十三〕昨日、戦場にいた者たちがおのれの剣を血で塗ることに懸命だった時に、あなたが城壁の中に――幸運にも助けられて――運び込ませたかの家畜や穀物は、空腹にあえぐ人たちの一部の人にしか行き渡りません。もし敵の襲撃が長期化すれば、大勢の市民たちを飢えから救うには十分でなく、攻防の長期化は避けられないのです、たとえエジプト軍が予定された日に到達するとしても。

〔四十四〕しかし、もしエジプト軍の到達が遅れたとしたら、どうなるのでしょうか。そんなことは考えたくないでしょうから、エジプト軍があなたの期待する日よりも、そして自らが約束した日よりも早く到達するとしましょう。しかし勝利は…、わが君主よ、敵に包囲された城壁に平和が回復されるとは思えません。戦いましょう、良き王よ、かのゴッフレードと、かの武将たちと、そしてアラブやトルコやシリアやペルシャの軍勢を何度も破り、敗走させた、こうした者たちの軍団と。

〔四十五〕かれらの戦力がどれほどのものか、それは、おおアルガンテよ、あなたが知っているでしょう。かれらに何度も戦場を明け渡し、何度も俊足を飛ばして敗走したあなた自身が。かれらの強さは、あなただけではなくクロリンダも知っており、互いに相手と比較して自己を誇るべきではないあなた方二人と同じように、私も知っています。誰かを非難するつもりは私には全くないのです。これまでの戦いにおいて、我々ができる限りの武勇を発揮したことは、誰の目にも明らかなのですから。

〔四十六〕そしてもう一つ言いましょう（たとえこの男がひんがら目で私を殺すと威し、真実を聞こうとしなくとも）。私はさまざまな確固たる証拠から判断するに、敵軍が宿命ゆえに避けることのできない運命に導かれていると思うのです。軍勢によっても、強固な城壁によっても、運命に――運命は支配者として君臨することがないが故――対抗することはできません。私は君主であるあなたと祖国に対する愛と忠誠心から（天よ、私の証人になり給え）、このように申し上げるのです。

〔四十七〕ああ、トリポリの王は何と賢明であったことか。かれはフランク人と和平を結んだうえに、領土を守ることもできたのだから（十五）。だが頑固者のスルタンは、今や死んで倒れているか、囚われて足に鎖を付けられているか、あるいは自信をなくして敗走した挙句に放浪の

身になったか分からないが、とにかく生きながらえてこの上なく哀れな境遇にある。自国の一部をたとえ譲ったとしても、貢物を納めたり、金銭を支払ったりすることで、残りの領土は失わずに済んだものを。」〔四十八〕このように述べたが、この男は曖昧で、婉曲的な表現を使うことで自らの意図を隠していた。なぜならかれは王に対して、和平を敵に申し入れ、敵の領臣になるようあからさまに進言することを憚ったからである。しかし激したスルタンは、靄に隠れたまま、この男が言う言葉を――魔術師から「あのように話す男を、わが君主たる方よ、放っておくのですか」とそのとき言われたのだが――これ以上聞き流すわけにはもはやいかなかった。

〔四十九〕「わたしは意に反して今この靄の中にいるのであって、怒りと悔しさで煮えくりかえっています。」ソリマーノが魔術師にこう言うやいなや、かれらを蔽っていた雲の膜が裂け、広大な空に吸い込まれた。ソリマーノは明るい昼の光に照らされて姿を現し、堂々とした勇ましい顔を部屋の真ん中で輝かせ、人々に向かって出し抜けに話し始めた。〔続く〕

註

一　今回掲載する訳は紀要四十五号で紹介した訳の続きで、第九歌と第十歌にまたがっている。内容的には六つに分けられよう。まずエルサレムに到着したソリマーノの軍勢がキリスト教軍を襲撃する部分（第九歌の四十二節まで）、アルガンテとクロリンダが町の外に出て、城壁のする外にいるキリスト教軍を襲い、もう一つの戦線ではゴッフレードがソリマーノとに迫っていく場面（同五十五節まで）、神が大天使ミカエルを戦場に送って、イスラム軍を鼓舞する悪魔たちを退散させる場面（同七十三節まで）、戦闘に加わったアルジェッラーノがソリマーノの小姓を殺し、そのためにソリマーノによって殺される場面（同八十八節まで）、アルミーダの虜となっていた五十人のキリスト教軍兵士達が戦場に戻ってきて、イスラム軍を敗走させる場面（同九十六節まで）、魔術師イズメーノに導かれたソリマーノがエルサレムの町中へ向かい、アラディーノ王が開いている会議を傍聴する場面（第十歌四十九節まで）。

二　キリスト教軍によって滅ぼされたニケーア国の王であったので「スルタン」と呼ばれることがある。

三　今回の訳出部分にも比喩が沢山見出される。その多くはウェルギリウスの『アエネーイス』をはじめとする古代ギリシャ・ローマ文学の作品を典拠としている。

四　川は古来、しばしば雄牛にたとえられる。

五　第六歌五十五におけるタンクレーディとアルガンテの決闘においても、キリスト教軍を代表する前者は武勇や徳に、イスラム軍を代表する後者は狂気や大胆さに結び付けられた（紀要四十二号拙訳）。

六　ソリマーノとアルガンテとクロリンダの三人は同じイスラム軍に属していながら、互いに対抗意識が強い。第十歌四十五ではそうした対抗意識を互いに持つべきではないことがオルカーノによって述べられる。

七　大天使ミカエルは天使たちの統率者。

八　「特異な」は土星と木星のみならず、「他の星ぼし」（火星、太陽、金星、水星、月）にもかかる。これらの星はそれぞれ勝手に動いているのではなく、神が天使の知を介してこれらの星を動かしている。よって「惑星」と呼ばれるのは正しくないとタッソは言う。

九　ジルディッペはソリマーノと、クロリンダはタンクレーディと後にそれぞれ戦う運命にある。

十　第八歌五十七以下を参照。

十一　大勢の兵士達が走るときに立ちあがる砂煙のことを「雲」と表現していると思われる。九十五節の「雲」も同じ。五十三節の「雲」は悪魔たちが雲のごとく空を覆うという意味であろう。

十二　これらの十字軍兵士達は、地獄が送り込んだ美しき魔女に付き添って、戦場を離れた者たちである（紀要四十一号拙訳参照）。かれらがその後どうなったかは第十歌後半で語られる。

十三　十二世紀にエルサレムをキリスト教徒から奪回したサラディンを差し、タッソは有能な為政者として名高いサラディンがソリマーノの子孫であるとする。

十四　十六世紀に中近東の領土をトルコに次々と奪われたヴェネツィア人が最後まで（一五七一年まで）所有したキプロス島を指す。

十五　キリスト教軍に降伏して、和平交渉を始めることをオルカーノは暗に提案し、キリスト教軍に敗れながらも貢物を贈るなどして敗戦の被害を最小限に食い止めたトリポリの例に倣うべきだとしている（第一歌七十六節参照）。